

## 動詞の意味に対する形式意味論的アプローチ — 「概念意味論」 批判 —

『ユーラシア諸言語の動詞論 (4)』 千葉大学院人文社会学研究科 2007 pp. 1-26

### 1. 手がかりの事例

日本語の標準的な用法に次のような一群の表現がある。

- (1)a. ベランダから富士を見る。
- b. 富士が遙かに見える。
- c. ネコにテレビを見せる。
- d. 浜に汐見に行く。
- e. 相撲をただ見する。

(1a)の「見る」は他動詞で2項動詞、動作主 (Agent, Aと略) が隠されている。目的 (Object, Oと略) がヲ格で表示される。(1b)の「見える」は自動詞で1項動詞、語幹は{mi-e-}、見えるモノがガ格で表示される。ここでは隠れた主体を想定できる。主体を深層格とすれば、相手=被動者 (Patient, Pと略) または、主体 (Subject, Sと略)<sup>1)</sup>とする。(1a)の見えない動作主は、提題にならないならば、ガ格で表示されるはずなので、(1a)と(1b)とは他動詞「見る」: 自動詞「見える」の統語関係、すなわち自動・他動性対立 (transitivity opposition) をなす。このとき(1a)では目的Object, Oがヲ格、(1b)ではガ格で表示される。(1c)の「見せる」は3項の他動詞、語幹は {mi-se-} で、ネコが相手=被動者P、「テレビを」はヲ格で表示された目的O。ガ格の動作主 (Agent, Aと略) は見えない。(1d, e)はともに動詞派生名詞 {mi-} (連用形) からなる複合語。(1d)「汐見」では、動詞「見る」の連用形 {mi-} に目的の「汐」が、(1e)では副詞句「ただで」の格なしの形「ただ」が前接する。ともに主要格のうちの「ヲ」と斜格の「デ」など格標識のない形で、合成名詞の構成要素となっている。

(1)の全ての表現には共通の語根「見」がある。この共通語根√mi- は唯一の抽象的な意味をもつ。それを「視覚認知」と呼ぼう。(1a, b, c)ではどれも「見」が動詞語幹を作る要素であり、(1d, e)では動詞派生名詞を作るので、共通語根√mi- は動詞と名詞の二つの品詞的カテゴリーの共通要素である。つまり品詞に分かれないという意味で「実詞的 (substantive)」である。この共通語根√mi- から「見る、見える、見せる、見-」などの動詞が派生する。それぞれに動詞派生接辞、φ、-e、-se が付いて、「見る」は、√mi- がそのまま、語幹 {mi-} になる、「見える」は √mi-+e- が語幹、「見せる」は √mi-+se-  
.....

註1) Aは、Comrie 1978 以来の概念である。そこでは、Sの他にA, Oが仮定される。Dixon, R. M., 1994 や 佐々木冠 2006 ではSを二分してSa (agentive S), So (objective S) という範疇を立て、A, S (=Sa + So), O

を本来的意味範疇とする。

が語幹であって、それぞれ語幹形態素を作る。これら語幹に直接に時制形態素-(r)u が後接すると自立語としての動詞ができる。

次に、類例として「向く、向かう、向ける、向き」の語群について見る：

- (2) a. ネコもそっぽを向く。
- b. 玄関が北に向くのはよくない。
- c. 故郷の山に向かいて、言うことなし。
- d. 救助隊が直ぐに山に向かった。
- e. 面を天に向けて話をする。
- f. 斜め横向きの像。

「向く、向かう、向ける、向き」に共通な語根は  $\sqrt{\text{muk-}}$  で、その意味を「対面」と考える。この形態素も特定の品詞にはならない。「向く」は方向(Directive、DIR、Dと略)を深層格として持つが、その格標識は(2a)ではヲ格、(2b)ではニ格である。これらの例文で第一項の標識ガ格は深層格が違う。(2a)では「ネコ」が動作主A、(2b)では「玄関」が無生物・非意志的なので、これは目的Oと考えるか、意志性の主体Sと区別して、モノ的主体、例えば、So という範疇を立てるかどちらかであろう。ここでは暫定的に目的Oとする。(2c、d)の動詞の語幹は{muk-aw-}である。語根 $\sqrt{\text{muk-}}$ と自動詞を作る接辞 -aw- の合成で、方向の深層格を伴う。しかし(2d)が意志的行動を表すに対して(2c)は必ずしも強固に有意志的ではない。車窓から眺めていたら山が見えてきて自然に対面することになったという程度の意志性である。有意志性に階層を認めなければならないようだ。(2e)の「向ける」は3項他動詞で、語根と動作主Aと相手=被動者Pと方向Dを深層の必須項とする。この動詞の語幹は $\sqrt{\text{muk-e-}}$ であり、-e- が他動詞派生に使われている。「見る」の例のうち(1b)の -e- が自動詞派生接辞だったので、この語幹派生接辞 -e- は多義的である。(2f)の「斜め横向き」は動詞連用形から派生した名詞「向き」に「横」と「ななめ」がこの順で前接した複合名詞である。

## 2. コトの過程の類型を決めるためのモデル

上の文例(1)、(2)の語根形態素<sup>2)</sup> {mi-, 視覚認知}も{muk-, 対面}もコト(events、事態とも言う)の表現である。コトはきまって推移の過程(Process)をもつ。コトの言語表現はそれぞれにコトの推移過程を表現(represent)している。推移過程は、始まり、継続、終わりの型によって類型化される。この推移過程の契機については有効な論理モデルがある<sup>3)</sup>。それを簡略化して以下に示す：

推移過程を決定する契機：

- (3) a. ComesAbout:  $-e \ \& \ e$ 、即ち  $-e[e]$  (コト (e と略す) が起こる、コトの生起)
- b. Cease:  $e \ \& \ -e$ 、即ち  $e]-e$  (コトが止む、コトの終止)
- c. Remain:  $e \ \& \ e$ 、即ち  $]e[$  (コトが続く、コトの持続的存立)
- d. RemainsFalse:  $-e \ \& \ -e$ 、即ち  $] -e[$  (コトが無い、コトの持続的非存立)

推移過程の契機(3a, b, c, d) によってコト e の成立のあり方について次の基本類型を得る。

(4) 或る時間 t, t' に関して、コト e は次のように成立する：

- a.  $e = [t, t']$  (t で生起、t' まで継続するコト=両端が閉じたコト)
- b.  $e = [t, t'[$  (t で生起、t' で終わるコト=左が閉じて右が開いたコト)
- c.  $e = ]t, t']$  (t で始まり、t' まで継続するコト=右が開いて左が閉じたコト)
- d.  $e = ]t, t'[$  (t で始まり、t' で終わるコト=両端が開いたコト)
- e.  $e = t]$  (t まで継続するコト=左に閉じたコト)
- f.  $e = t[$  (t で終わるコト=左に開いたコト)
- g.  $e = [t$  (t から始まるコト=左に閉じたコト)
- h.  $e = ]t$  (t で始まるコト=右に開いたコト)
- i.  $e = T$  (いつでも真のコト)
- j.  $e = \phi$  (いつでも偽のコト)

コトの類型(4)は非常に強いモデルなので、自然言語が表現しない類型もある。例えば(4f)の型に対応する日本語の動詞は見つからない。

### 3. コトの推移過程と時間

上の(3), (4)から、コトの推移過程の形(Process Types)は、第一に、それぞれのコトの始まりと終わりの枠が開いているか閉じているかによって決まること、第二に、コトの推移過程がコトの状況、それ以前の予備的状況 PreSIT、本来の状況 SIT、それ以後の後続状況 PostSIT の三つの状況の連鎖であることがわかる。いま二つの時間(Intervals)、t, t' .....

註2) 「語根形態素」という範疇を立てる。従って動詞語形の形態に「語幹形態素」などの形態素の階層的類別を考えることになる。

註3) このモデルは1970年代の後半約3年半 Stuttgart 大学言語学研究所を中心に国際的な規模で行われた。その成果は Guenther, F. & Chr. Rohrer (eds.): studies in formal semantics. North-holland Linguistic Series 35. North-Holland 1978 に収録されている。ここではそのなかの Aqvist, L. & F. Guenther: Fundamentals of a Theory of Verb Aspect and Events within the Setting of an Improved

Tense Logic pp.167-199 を中心にモデルを作った。

を仮定する。

コトの推移過程はこの二つの時間の間を進む。つまり、本来的状況 SIT はこの二つの時間に推移する過程であり、 $t, t'$  で区画される。この時間が推移過程の区画を作る。

いま、開 “[”でも閉 ”]” でもない区画の枠を “|” で表示すると、この状況の連鎖は次のように表せる。

(5) PreSIT |  $t$  SIT  $t'$  | PostSIT

これを次のように標準的に書く：

└ ( $t, t'$ ) | SIT | (時間  $t, t'$  の間で状況 SIT が成立する)

但し、a) | は SIT に向かって閉じた区画枠 [ または SIT に向かって開いた区画枠 ] のどれかを表す変項とする、例： ]SIT[ は左右に開いた枠に囲まれた推移過程を示す。

b) ここで時間  $t, t'$  は時間の集合  $T$  の要素である。その時間集合  $T$  について次のような一般的モデル  $M$  を前提する (詳細の説明は省略)：

(6)  $M = \langle T, t_0, <, \{ \geq u \}_{u \in p(T)}, V \rangle$

但し、(1)  $M$  はモデルであり、

(2)  $T$  は空でない時間または時間帯の集合、

(3)  $t_0$  は発話時点で、 $T$  に含まれ、

(4)  $<$  は時間的前後関係 (precedence) を表し、 $T * T$  に含まれる操作要素であって、厳密に線条的であつ隙間なしの前後関係を表すから、任意の時間  $t$  と  $t'$  の間に次の関係が成り立つ：

(i) 同じ時間が重なることはない。

(ii) 順繰りに配列される、つまり転移的であつて、ループがない。

(iii) 二つの時間の間には、 $< \text{か} > \text{か} = \text{か}$  の関係しかない。

(iv) 二つの時間の間には必ずまた別の時間がある。

(v) 前後に無限である。

(5)  $\{ \geq u \}_{u \in p(T)}$  は弱い前後関係で、事態がある時点から始まるか、ある時点まで続くなどの時間関係を示す。

(6)  $V$  は評価関数で、ある事態がある時間で成り立つかどうかを決定する。

#### 4. 動詞の語彙アスペクト

自然言語の動詞が表現するコトの推移過程は、上の論理モデルに示された類型に比べるとはいくつかの点で過不足する。例えば、上の (3e, f, g, h) に対応する状況を非派生的な動

詞の単体が表すかどうかは分からない。これはモデルが強すぎるためである。一方、モデルに不足する要素がある。最も重要な欠落は表示状況 SIT の長さという契機である。自然言語ではこの契機を大変に重視する。例えば、日本語動詞では SIT が長く続くか、それとも瞬間的かという契機が動詞の意味の分類の上で大切な目安となる。また SIT が短いと言ってもそれがゼロであるとは限らない。極小、つまり推移過程が大変に短くて殆どゼロに近いという場合がある。これも SIT が瞬間相である場合の一つの表れである。しかし全体として、動詞の表すコトの推移過程は次のような「状況連鎖の枠内に収まる：

(7) PreSIT | SIT (dur/pun~min) | PostSIT

ここで dur=durative, pun=punctual, min=minimal, ~: 乃至を表す。

しかし或る個別動詞の表現するコトの推移過程、すなわち語彙アスペクトを記述するには、記述対象の個別言語の内部にある情報を目安として用いる。つまり個別言語内的な基準による規定が必要である。金子(1995, 2003)では日本語動詞の推移過程を決めるためのパラメータとして次の目安を用いた（ここでは例示するに止める）。

(8) a. 基準 a : 「(イ)Vル」 = 表示状況の開始

	規準に対する反応	相	表示	例
a0	この形を持たない	恒常相	]]V...	{ある, できる}
a1	表示状況の成立を表示	左開	]V...	{いる, ある}
a2	表示状況開始前を表示	左閉	[V...	{動く, 点く}

b. 基準 b : 「(イ)Vテイル」 = 表示状況の長さ

b0	この形を持たない	状態相	[V(dur)]	{居る, 要る}
b1	表示状況の部分を表示	部分状態相	][ (dur) ] [	{続く}
b2	表示状況の過程を表示	継続相	[ (dur) ]	{動く, 聞く}
b3	結果の状態を表示	結果相	[V[res	{点く, 着る}
b4	過程と結果状態とを表示 示: 二義的	継続結果相	[V(dur)]res	{飾る, 開く}
b5	多回・経験を表示	閉瞬間相	[V(min)]	{起こる}

但し、res=resultative (Vendler1967 などの "achievement" に相当)

c. 規準 c : 「タ形」 = 表示状況の終結

c0	この形をもたない	恒常相	]]V[[	{ (で) ある}
c1	一義的に defaultV が成立	均質状態相	]V[	{いる, 合う}
c2	状況開始 V↑ か完了 V↓ を表示: 二義的	閉継続相	[V(dur)]	{動く, 押す}

c3	表示状況終結を表示	左閉	...V]	{休む, 打った}
c4	結果の残存を表示	結果相	[V[res	{来る, 止まる}

d. 規準 d : 「タンタンVル」+など=表示状況の推移

d0	「シバラクVル・タ」, 「Vテクル・テイク」がない	瞬間推移相	V(min)	{訪ねる, 置く}
d1	「シバラクVル・タ」が可能	均質推移相	V(dur(homo))	{走る, 進む}
d2	「(タンタン)Vテクル・テイク」が可能	過程的推移相	V(pr)	{近づく, 晴れる}
d3	「タンタンVル」が可能	漸進的推移相	V(gr)	{広がる, 登る}

但し、homo=homogenous, gr=gradual, pr=progressive

e. 規準 e : 「テアル」「テオク」=効果性

e0	この形がない	非効果相	V...	{動く, 続く}
e1	この形が成立する	効果相	V[or]eff	{書く, 飾る}

但し、eff=effective (Vendler1967 などの"accomplishment"に相当)

f. 規準 f : 命令が可能=意思(行動)性(後述)

f0	命令が不可能	非意思相	V(non-act)	{要る, 流れる}
f1	命令が可能	3意思相	V(act)	{食べる, 回る}

g. 規準 g : その他の補助的な特性

g0	特記すべき特性がない	φ	φ	φ
g1	連体形だけの形がある	連体性	V(adn)	{面する}
g2	接辞的用法だけ	接辞性	V(aff)	{られる}
g3	時制形式に欠落がある	非時制	V(atemp)	{対する}
g4	「マオク V」が成り立たない	前状況	defaultV	{似る, 当たる}
g5	「イツモ V, シバラク V...」などの文脈に立つ	継続相	V(dur)	{見える, 歩く}

これらのパラメータを国立国語研究所『日本語教育のための基本語彙調査』(志部昭平編)1984に含まれる大部分の動詞に当てはめて、それぞれの動詞の表示するコトの経過過程を典型的に分類した。

その一例をあげる：

(9)

	a	b	c	d	e	f	g	LA-type
「見える」	1	2	3	0	0	0	0	
	]	dur	]					]dur]
「見る」	2	2	2	1	1テオク	1	0	
	[	dur	dur]	homo	(eff)	imp		[dur. homo](eff)

このようにパラメータの値を合成することによって、それぞれの動詞の語彙アスペクトが決定される。しかし語彙アスペクト的に二義的な動詞もかなりあって、金子 1995 年の語彙アスペクト分類は十分ではない。例えば上の「見る」では効果性 effectivity, eff について曖昧である。テオク形があってもテアル形はむつかしい。それゆえ、ここでは eff を括弧に入れて示した。

その他の動詞についての語彙アスペクト分類の詳細は省略するが、分類の結果は以下(10)にあげる(次ページ)。これは例(8)の言語内の基準を用いて、300余の動詞を分類した結果である。この分類にはいくつかの目安について修正する必要があるが、全体として見ると、日本語動詞がその表すコトの推移過程の特性に関して、このように分類できること、従って、日本語の動詞に次のような型の語彙アスペクトが存在することを示した点で新しかった。ここで示した形式意味論的な要点は、とりわけ、日本語動詞の語彙アスペクトがそれぞれの動詞語幹の意味的な特性の一つであるという点である。

語彙アスペクト類型(10)で得られたのは、日本語動詞の意味が表すコトの推移過程の類型である。しかし一般的な動詞の意味の類型という観点からすると、この類型は純化が不足である。剰余が含まれ、考察も十分ではない。しかし当面上の語彙アスペクト分類を動詞意味記述のための手懸かりとする。とくに特性 act に関しては「6. 意志的行為について」で論及する。

## 5. 動詞の項特性とその類型

(1)の動詞「見る、見える、見せる」および(2)の「向く、向かう、向ける」の語幹形態素は次のように語根と語幹形成接辞から出来る。そのとき語幹形態素の意味の側面には固有の語彙アスペクトが与えられる：

(11)

語根	派生接辞	語幹形態素	語彙アスペクト
√mi-	φ	{mi-}	]dur]
	-e	{mi-e-}	[dur. homo](eff)
	-se	{mi-se-}	[dur. homo]eff
√muk-	φ	{muk-}	[pun[
	-aw	{muk-aw-}	[dur[res, [dur]
	-e	{muk-e-}	[min[eff





(7ページから続く)

しかし語幹形態素の意味の側面には語彙アスペクトが付属するだけではない。ある語幹形態素はきまってそれに伴う項を含意する。その性質を項特性と呼ぼう。項特性はさまざまに呼ばれてきた。動詞価(valance)、深層格(deep cases)、意味役割(semantic roles)などであるが、このうち動詞価では格標識と深層的な意味とが区別されないこともあった。しかしここでは項特性を深層格に近い意味合いで、意味的な特性として、その形式的な表示は格標識と名付け厳格に区別する。項特性は動詞の語幹形態素の意味的な特性の一つであり、格標識は形態論的な表示であって、形態と統語とに関わる。

形態素{mi-}は例文(1a)から判断されるように、この文は、ヲ格の目的語とカラ格の補足語の2価をもち、ガ格の主語を欠いている。しかし意味的な項特性は、動作主A、目的Oを必須の動詞価として、出発点St (StartPoint または Sc, Source) をオプションにもつ。これを $\langle A, O, (St) \rangle$ と表示しよう。意味的な項特性と格標識との対応は、A: ガ格、O: ヲ格、St: カラ格である。形態素{mi-e-}の項特性は例文(1b)では、「富士が」がO、見える人がPなので、 $\langle O, P \rangle$ であり、格標識との対応は、O: ガ格、P: ニ格で多くの場合、提題ニハになる。いずれにせよ2価である。形態素{mi-se-}の項特性は文(1c)によると、A, O, Pの3項で、それぞれ格標識ガ格、ヲ格、ニ格に対応する。意味的にも形態的にも3価動詞である。

次に形態素{muk-}は例文(2a)に関する限り、有意志の動作主A(ネコ)が「そっぽを」、つまり方向Dir(Dと略)の二つの項をとっている。ここでDがヲ格をとっていることに注意。一方、(2b)で同じ形態素が動作主ではない「玄関」を主語としている。これを目的Oとする。格標識はガ格である。「山に」は方向Dで標準的に二格で表される。従ってこの形態素の項特性は $\langle A/O, D \rangle$ であり、A/Oがガ格、Dがヲ格または二格に対応する。

形態素{muk-aw-}も単純ではない。(2a)の主体は隠された「私」であるが、これは無意志的な動作主Aである。これを特に $A^{-INT}$  (Agent -intentional)とするか、目的Oとするかは判断が分かれる。ここでは妥協的に $A^{-INT}/O$ としておこう。ここでの問題は、次のような論議をもたらす:

(12)

- (a) 動作主Aが必ずしも有意志的ではないこと、言い換えると、動作主Aは有意志的と無意志的な主体に下位区分するべきかどうか、
- (b) このうち、有意志的動作主とは $A^{+INT}$ 行為者Actor、すなわちactivityの主体、深層格activeと同じかどうか、
- (c) だとすると行為者Actor、無意志的の主体 non-intentional Subject のようなカテゴリーが日本語の動詞項特性の記述にも必要なかどうか。

しかしここではこの論議を別の機会にゆずり<sup>5)</sup>、形態素{muk-aw-}の項特性を $\langle A^{-INT}/O, D \rangle$ としておこう。一方、例文(2c)の{muk-aw-}は動作主Aが方向Dに行動を起こすことを表す。こ

のときの項特性は〈A, D〉で、それぞれ格標識ガ格と二格に対応する。つまりAはA<sup>+INT</sup>である。従って、形態素 {muk-aw-} の項特性は〈A<sup>+INT</sup>, D〉または〈A<sup>-INT</sup>/O, D〉とする。表層的な対応はA<sup>+INT</sup>/A<sup>-INT</sup>/O : ガ格、D : 二格である。つまり、形態素 {muk-aw-} はその項特性が二つある。項特性的に二義的である。この性質はこの語の語彙アスペクトとも対応する。

「向かう」の項特性が 〈A<sup>+INT</sup>, D〉 であるときの語彙アスペクトは行動性で結果を残さない。例えば「ている」を付けると、人が何処かへ向かっている最中を表示する。すなわち [dur] であるが、一方で 項特性が 〈A<sup>-INT</sup>/O, D〉 のときはアスペクト形式の「ている」を付けると、対面行動中の行動かあるいは対面行動後の対面状態が表されるのでこの時の語彙アスペクトは、「着る」などと同じく、二義的で [dur[res と判断できる。

形態素 {muk-e-} は例文 (2d) に関する限り、この形態素は 3 項他動詞の項特性を持つ。すなわち〈A, O, D〉で、格標識対応はそれぞれガ格、ヲ格、二格である。このときAはA<sup>+INT</sup>であって、A<sup>-INT</sup>ではない。つまりA=actorである。

以上で見た項特性は 6 つの形態素に固有の特性であるので、それを上の一覧表 (11) に付け加える (太字部分)。

(13)

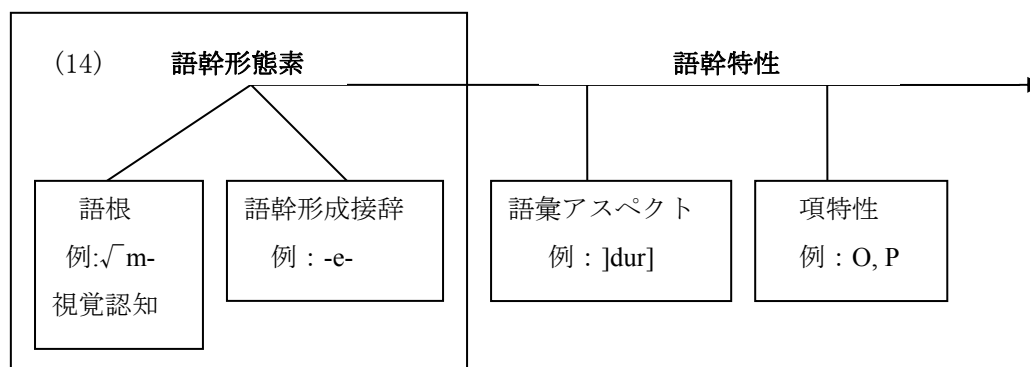
語根	派 生 接辞	語幹形態素	語彙アスペクト	項特性と格標識	
√mi- (視覚認知)	φ	{mi-}	]dur]	〈A, O, (St)〉	が、ヲ、カヲ
	-e	{mi-e-}	[dur.homo] (eff)	〈O, P〉	が、ニ
	-se	{mi-se-}	[dur.homo]eff	〈A, O, P〉	が、オ、ニ
√muk- (対面)	φ	{muk-}	[pun[res	〈A/O, D〉	が、ニ
	-aw	{muk-aw-}	[dur], [dur[res	〈A <sup>±INT</sup> /O, D〉	が、ニ
	-e	{muk-e-}	[min[eff	〈A, O, D〉	が、ヲ、ニ

これが語幹形態素の構成である。例にとった「見」を根にするいくつかの語幹形態素について言えば、語幹形態素 {mi-e-} は「等質的継続過程をもち、場合によってはその効果を残すようなコトを表示して目的と相手という二つの項をもつような視覚認知である」という意味を持ち、その音形は/mie-/である。また、形態素 {muk-aw-} のうち意志的行動A<sup>+INT</sup>を表す場合は「継続性で結果性のプロセスをもち、動作主があるところへ向かう行動をするという対面行動を表示する」、一方で非意志的な場合は「動作主か目的が第1項であり、その項特性は 〈A<sup>+INT</sup>/O 〉であり、対面行動中か対面行動後の結果状態が表示される」となる。

.....

註5) 日本言語学会大会2007年春期で活格(active case/active structure/activity)についてのシンポジウムを予定している。その論議を待ちたい。

このように表(13)の要素とその結合によって語幹形態素の形式と意味とが与えられる。このとき、語彙アスペクトと項特性とはそれぞれその言語に特有な類型をもつモジュールとして語幹形態素に関わっている。またこの二つのモジュールの類型は相互に影響を与え合うという形で関連していることが分かる。以上を概念図にすれば次ページ(14)のようになる。



## 6. 意志的行為について

日本語動詞意味の推移過程類型(10)にはいくつかの欠点がある。そのうちの最も重大な欠点は表示状況 SIT の特性記述の act である。その特性は第一に、推移過程の時間的特性ではない。従って、dur, pun, min, gr などとは異質である。第二に、この特性のために類型が余計に増えている。例えば、瞬間相を三分してあるが、act を外すと二分類で間に合う。第三に、act はもともと項の質的特性であって時間的特性ではない。つまり、語彙アスペクトの類型特性にとっては異物である。以下簡単に動詞推移過程類型からこの特性を除去するための議論を試みる。

上の例「(1a) ベランダから富士を見る、(1b) 富士が遙かに見える」で、(1a)の潜在的ガ格の項は有意志の動作主  $A^{+INT}$  である。一方、(1b)のガ格の項は目的0であって、有意志体や生物という特性とは無関係の対象物である。つまり目的0は人間でも石でもいい。またこの文では潜在的に被動者P、例えば「私には」、が隠れている。従って、「見る」の項特性の性質は  $\langle A^{+INT}, 0, (St) \rangle$  であり、「見える」のそれは  $\langle 0, P, (St) \rangle$  である。

(2a)の「ネコもそっぽを向く」の動作主は人間ではないが、意志を持つ行動主体、つまり動作主  $A^{+INT}$  である。一方、(2b)「玄関が北に向くのはよくない」のガ格の項は動作主ではなく、無意志・無生物のモノである。これを目的0 とすると、語幹形態素 {muk-} の第1項は共にガ格の標識をとるが、 $A^{+INT}$ か0を表す。(2a, b)の必須項と格標識との関係は次のようである：

(15)

	(2a)	(2b)
項特性	$\langle A^{+INT}, D \rangle$	$\langle 0, P \rangle$
格標識	ガ ヲ	ガ ニ

この型の格標識は「主格的」<sup>4)</sup>である。つまり動作主と目的に関係なく、第1項をガ格で表示して、しかも意志性・有生性を尊重しない。さらに(2b)では方向がヲ格標識を持ち、ちょうど「我が道を行く」のような経路がヲ格表示になるのと同様である。

ここから(10), (11)の動詞推移過程類型で考えられた意味分類的な特性 act について次のように言える：

- (16) a. "act"とは動詞語幹形態素の意味的特性の一つである項特性の要素 A<sup>+INT</sup>である。
- b. 従って、それは語彙アスペクト類型の特性ではなく、(10)から排除されるべきである。
- c. "act"の特性、すなわちA<sup>+INT</sup>は有生的で有意志的な動作主を表し、他の種類の動作主、例えば、A<sup>-INT</sup>や使役者causerと区別される。これをactorと表示してもよい。
- d. act/actor は上記(8f)の基準「命令可能性」の言語内基準に照らして規定可能である。

## 7. 語幹形態素の拡張

語幹形態素はそのままで語を作らないので、自立形式ではない。それが自立するためには、3種類の接辞形態素を付けなければならない。

第一種は、屈折的な接辞形態素を付けて語幹形態素を拡張する場合である。接辞形態素{-r)u} (連体および終止)、{-r)eba} (仮定)、{-r) o/e} (命令)を付ければ、語幹形態素から自立語が作られる。

第二種は、接辞形態素{-i}を付ける場合で、この接辞は第一に名詞化接辞として機能する。例：{muk-}+{-i} → {muki}「向き」(「この玄関は向きが悪い」)。第二にこの接辞は複合動詞 V1+V2→V を作るために使われる。語幹形態素に接辞形態素{-i}を付けて、他の動詞語幹形態素につなぐ。例：{muk-}{-i}+{owar-}→{muki=owar-}「向き終わる」。連用形という呼称はこの機能を取り上げたものである。連用形に接続する用言のなかで、以下ではアスペクト形式の一部を特に取り上げる。「一開始める、一終わる、一終える」などである。

第三種は、動詞語幹形態素に派生接辞{-a}が付いた形式であり、これは非自立形式のままである。例：{muk-}+{-a}「向か-」「政治家には向かない」。古典的派生接辞であって、現代語では{na-}「>無い」と{(s)ase-}「させる」を接続させる。

.....

註4)「主格的」とは深層の項特性と格標識との対応関係で構成される項格類型の一つであって、有意志の第1項と無意志目的の第1項に同じ格標識を与える項格類型を指す。「対格的」「能格的」「活格的」構造な並ぶ格構造類型とする。

さらに別種の接続形式として、いわゆるテ形がある。動詞連用形に{te} (>-tari)を付

けて、次の用言の語幹形態素に前接させる。例：{muk-i-}+{te} > {muite} 「向いて」「玄関が北に向いている」。この形式は多くのアスペクト形式との接続を可能にする。動詞複合体 (converbs, verb complexes)<sup>6)</sup> を作る上で大切な形式である。

以上をまとめると、次の表になる：

(17)

	語幹形態素	接辞	自立性	機能
第一種	例：{muk-}	{-(r)u}, {-(r)eba}, {-(r)o/e}	自立	連体、終止、 仮定、命令
第二種	例：{muk-}	{-i}	自立 接続	名詞化 複合体形成
第三種	例：{muk-}	{-a}	非自立	複合体形成
第四種	例：{muk- }	{-i-}+{-te}	自立的 付属語的	中止め・ 複合体形成

これらの形式のうち、第二種～第四種の接合形式が動詞複合体を形成するために用いられる。以下では、接続形式の種別ではなく、動詞複合体の意味的な機能のうち（１）アスペクト形式と（２）態をつくる形式に関わって動詞語幹の拡大について考える。

## 8. アスペクト形式による語彙アスペクトの補正

上の(10)で示した日本語動詞が表示するコトの推移過程類型、すなわち語彙アスペクトの類型は動詞語幹形態素の意味の一部である。一方、日本語には動詞の連用形に接続したりテ形になったりして動詞複合体を作る形式「-はじめる、-ている、-である」などがある。これらを一括してアスペクト形式と名付ける。

アスペクト形式の機能は、前接動詞の語彙アスペクトの一局面を取り出し修正するなど、局面の一部に焦点をあてることにある。「食べ-はじめる」は「食べ」の開始局面を、「結婚し-ている」は「結婚する」の PostSIT である結果の状態という局面を取り出す。「窓を開け-である」は「窓を開ける」行動の効果の状態を示す。この機能を一括して推移過程の焦点化と呼ぶ。

.....

註6) 「動詞複合体」は「連動詞 (serial verbs)」と言われることもある。しかしここでは、前者では、[V+V]→V、[<sub>v</sub> V+V]のようなPS構造的recursivityの理念が背景にあり、後者では一次元的な動詞連続だけを見ていると思われるので、前者を採る。converbsの概念については特にHaspelmath/Koenig 1995 を参照。

アスペクト形式の機能を示す一例をあげる：

- (18) a. みゆきがこれから着物を着る。(未着衣の状況 inchoative)  
 b. みゆきが今ちょうど着物を着ている。(着衣動作中 durative)  
 c. みゆきはもうとうに着物を着ている。(着衣の結果の状態 resultative)
- d.                    ㄱ 着衣行為全体 ㄴ  
 \_\_\_\_\_ a [...].. b.. [...] [ c \_\_\_\_\_  
 未着衣状態    着衣動作中    既着衣状態

「着る」([着(dur)[res;<A, 0>])はアスペクト的に二義的である。アスペクト形式「ている」をつけると、着衣動作中bか既着衣状態cかが表現される。着衣動作中の継続状態は左右に開いた状態性の局面が、着衣状態では左に閉じて右に開いた半状況が表現される。つまりSIT内部の状態性の状況が切り取られるか、PostSITの結果状態resが焦点化される<sup>7)</sup>。

## 9. 項特性の変更

本動詞の形態素の意味を変えないで、項特性とその格標識を変更する動詞的接辞がある。日本語ではその接辞は非自立的動詞であり、服部四郎の規定では付属語に当たる。その主なものは受身の「られる-(r)are-」と使役の「させる-(s)as-」と再帰の「あう -aw-」で、それぞれに論点は多い。しかしここではそれに深入りせず、次の点を指摘するにとどめる。

### 9.1. 受け身における項の付加と削減

動詞連用形に「られる」を付けると、元の動詞のもつ項特性が変わる。第一に、動詞が本来持っていないはずの相手Pがあらたに付け加えられる。例えば次の文(19a)の項特性は(19b)のようである。また埋め込まれる文が他動詞文であっても事情は変わらない(19c, d) :

- (19) a. ぼくは若いときに[<sub>S</sub> 親父に死な] れた。  
 b. <P,                    A<sup>-INT</sup>/0 > V-rare-  
 c. ミサキは[<sub>S</sub> ハルミにイモを食べ] られた。  
 d. <P,                    A<sup>+INT</sup>    0 > V-rare-

この相手P(被動者項)の付加は、動詞が自動詞でも他動詞でも起こる。この相手項Pの付加は被害の受け身と呼ばれてきた。この種の受け身文は、文脈的に前提されたコトの表示event[<sub>S</sub>...]にそのコトに関わる関与者Pを付加するという情報操作である。ここで埋め込み文[<sub>S</sub>...]の第1項は二格で表示される。

これを一般化すれば、次のようになる :

(20) P ⇐ event[<sub>S</sub>S... ]

二格 (ハ)                      二格

但し、⇐: 「event[<sub>S</sub>S... ]がPに関わって起こる」と読む。これが受け身(Passive)の意味である。

一方、受け身のプロトタイプは、項の削減と降格という統語的情報操作であると言われてきた。例えば、次の文(21a)には受け身の(21d)が対応すると言われる。いまそれぞれの文の項特性を(21b)、(21e)としよう。それぞれの下段(21c)、(21f)が格標識である。

(21) a. ロシアネコがカラフトマスを食べた

b. <A<sup>+INT</sup>,                      0 >                      V

c. ガ                                      ヲ

d. カラフトマスが食べーられた

e. <    0                      >                      V-rare

f.                      ガ

この関連する二つの項特性(21b, f)を関係づけてみる。もし、(21e)が上の(20)と類似の意味と項特性を持っていると仮定すると、受け身文の意味は(22b)となる。ここでevent[<sub>S</sub><A<sup>+INT</sup>, 0 > V]のA<sup>+INT</sup>は同一者として消去され、0がガ格標識を得る。文外に出たA<sup>+INT</sup>は不要な情報として表現されない。しかし、もしevent[<sub>S</sub>< ~~A<sup>+INT</sup>~~, 0 > V-rare]の仕手A<sup>+INT</sup>を名指す情報上の必要があれば、A<sup>+INT</sup>は深層格C(=Causer)として表示され、その格標識はPと同じにニ(ヨッテ)になると考えてよいかもしれない(22b')。

(20) P ⇐ event[<sub>S</sub>S... ]

(22) a. P ⇐ event[<sub>S</sub><A<sup>+INT</sup>, 0 > V]

b. A<sup>+INT</sup> ⇐ event[<sub>S</sub>< ~~A<sup>+INT</sup>~~, 0 > V-rare]

ニ(ヨッテ)                                      ガ

b'. C ⇐ event[<sub>S</sub>< ~~A<sup>+INT</sup>~~, 0 > V-rare]

但し、C(=Causer)とA<sup>+INT</sup>とは同一者。

(21)の受け身文の場合、項の総数は2で項特性では変わりはないが、格標識では目的のヲ

.....

註7) 日本語アスペクトについては金子『言語の時間表現』1995に詳論した。世のアスペクト論とは別のアプローチを採ったので、評判が悪い。この本は絶版にしたが、CD版(2003改訂)があり、希望者に頒布できる。もっとも更に改訂の要があるが、再改訂版は別の本になるだろう。

格をガ格に昇格する。動作主A<sup>+INT</sup>が出る場合でもそれは二格に降格する。この項の昇格と降

格が同時に起きるが、動作主を  $\phi$  にまで降格するのだから、降格の方が受動という情報の焦点変更操作の主な動機であると判断してよい。

日本語の受け身は、接辞動詞の付加  $V-(r)are$  によって動詞複合体を作って、それに伴って元来の項関係を変更するという形態・統語的な情報操作である。この操作の機能は、項の削減・付加による部分情報の変更と視点の移動であると要約できる。

## 9. 2. 使役における項特性の変化

使役の接辞動詞「させる」も項特性を変える。この動詞的接辞は項を増やして、その結果、文全体の項特性と格標識を再配分する。いま使役接辞の付いた文(23a)は(23b)の項特性を持ち、その格標識は(23c)であるとする。文(23d)は使役文(23a)の元になった文で、その項特性と項の格標識は(23e, f)であろう。

(23) a. ミサキはハルミに在留許可証を見-させた

b.  $[_{s1} \langle A1^{+INT}, P, 0 \rangle V-sase ]$

c. ガ(ハ) ニ ヲ

d.  $[_{s2} \text{ハルミが在留許可証を見-}]$

e.  $\langle A2^{+INT}, 0, V \rangle$

f. ガ ヲ

使役の操作は、文(23d) から文(23a)を作る。元の文(23d)に新しい動作主「ミサキ」 $A1^{+INT}$  が付け加えられ、このとき元の動作主の項「ハルミ」は $A2^{+INT}$  からPに変わり、格標識はガからニになる。ここで文 $[_{s2} \dots]$  から文 $[_{s1} \dots]$  への変化、つまり使役化を受け身の場合と類似の形式で表示すると、次のようになる：

(24) a.  $A^{+INT} \Rightarrow \text{event}[_{s2} \langle A^{+INT}, 0 \rangle V]$

b.  $[_{s1} \langle A^{+INT}, A^{+INT}, 0 \rangle V-sase ]$

ガ ニ ヲ

但し、 $[_{s1} A^{+INT} \dots]$  の $A^{+INT}$ は Causer、

$[_{s2} A^{+INT} \dots]$  の $A^{+INT}$ は Causeeとなる。

ここで  $\Rightarrow$  は「能動的に関わる」、つまり「 $[_{s2} \dots]$ を引き起こす」と読む。

かねて使役には強制的な使役と許可の「使役」があり、許可のときの条件が埋め込み文の主語が有意志であって、義務的な使役はこの条件を満たさないと指摘された<sup>8)</sup>。強制的な使役は被使役者が有意志である場合もあり得るので、この対立を上を表記で示せば、次のようになる：



- (25) a. 強制的使役:  $A^{+INT} \Leftrightarrow \text{event}_{[s_2 \langle A^{\pm INT}, 0 \rangle V]}$   
 b. 許可の「使役」:  $A^{+INT} \Leftrightarrow \text{event}_{[s_2 \langle A^{+INT}, 0 \rangle V]}$

有意志の被使役者Causeeを表示する専用の格標識をもつ言語もある。ニヴフ語がそのような言語で、第二動作主であるに被使役者Causeeに特別な接尾辞を付けて表す。そのとき第一行為者は $\phi$ 標識、つまり絶対格になる。ここでは次のような一例をあげるに止める<sup>9)</sup>。

- (26) n<sup>i</sup> pajan-ax co ɲəŋt vi-gu-d<sup>i</sup>ra  
 私 パジャンに 魚 採りに 行か-せ-たよ。

ここで、-axが第二行為者Causee専用の格、gu-が使役の接辞で「させ」に当たる。

### 9. 3. 再帰表現の項特性

日本語には再帰代名詞はないが、接辞的再帰動詞 {-aw-}がある。これは次の文(27a)のように使われ、その項特性は(27b)であり、格標識は(27c)である。しかし動詞「見つめる」はもともと2項他動詞であって、(27d)のように使われ、その項特性は(27e)である。

- (27) a. 彼らは互いに見つめ合った  
 b.  $\langle A^{+INT}(P1) \rangle V\text{-aw-}$   
 c. ガ (ハ)  
 d. 彼は 蛇をじっと見つめた  
 e.  $\langle A^{+INT}, 0 \rangle V$

このような再帰表現は単純な他動詞文の等位接続から導出するという説明がかねてなされてきた。その際に動詞が同一であったり、目的語が相互に同一者を表現したりという複雑な等位関係が問題になった。しかしここではこれらの問題を避けて、次のような意味的な関係を仮定してみる：

- (28)  $\langle A1^{+INT}+A2^{+INT} \rangle \Leftrightarrow \text{event}_{[s \text{ \_\_\_ } V\text{-aw-}]}$   
 但し、a)  $\Leftrightarrow$  は「event[...]」が  $\langle \dots \rangle$  に関わる」と読む、  
 b)  $\text{\_\_\_}$  はそこに項  $\langle A1^{+INT}+A2^{+INT} \rangle$  が入ることを示す、また  
 c)  $\langle A1^{+INT}+A2^{+INT} \rangle$  の格標識はガ。

ここで見るように、再帰関係は動詞の項のうち目的0である項を一つ減らす。元来の目

.....  
 註8) 井上和子『変形文法と日本語』下 1976 大修館

的0が動作主 $A^{+INT}$ と合体して複数の動作主 $A^{+INT}(p1)$ を作るからである。従って、再帰化は

自動詞化に見える。その意味で再帰は受動化に似ているが、受動化が相手 0 を付加するという点で異なる。複数再帰代名詞をもつ言語では受動という文法操作を必要としないわけである。

以上、項特性の変項を伴う動詞複合体形成を 3 種見た。その意味論的な操作は、受動について (20), (22)、使役について (24)、再帰について (28) で見たとおりである。ここで残された論議は多々ある。例えば、(24) で二つの A<sup>+INT</sup> が重なるとき第一の A<sup>+INT</sup> と第二の A<sup>+INT</sup> とでどのように異なった格標識を与えるかという問題がある。第一の A<sup>+INT</sup> に特別な格を与えると能格性が優勢になる、などなど。これらの主に類型論的な問題は別の機会にゆずる。

## 10. 項特性の重層と格標識の変更

項特性は動詞形態素の特性であって、一つの動詞にはそれに固有な項特性が与えられている。従って、複数の動詞が重なって動詞複合体を作るときには、複合の過程で項特性は重なり合い、その都度、可能な格標識は変わる。しかし、動詞複合体の文が最終的に完成したとき、文形成過程での項の交替に関わる紆余曲折を含意しながら（例：文 (29) での見掛け上の被使役性）、項特性と格標識が整備される。

その様子を次の文で見る。文 (29a) の動詞部分は (29b) の動詞句からできている。この動詞句を作る構成要素は V1, V2, V3, V4, V5 で、それぞれの項特性と格標識は本来 (29c) のようである。

- (29) a. 娘を紹介させていただきたいのですが、、
- b.  $[_{VP} \{ v_1 \text{ syokai-s-} \} + \{ v_2 \text{ sase-} \} + \{ v_3 \text{ itadak-} \} \{ v_4 \text{-ta-} \} \{ \text{no} \} \{ v_5 \text{-des-} \} -u \text{ ga}]$
- c. V1:  $\{ \text{syokai-s-} \} < A = \text{話者}; \text{ガ格、P} = \text{聞き手}; \text{ニ格、O} = \text{娘}; \text{ヲ格、VP の主要素} >$
- V2:  $\{ \text{sase-} \} < A = \text{聞き手}; \text{ガ格、P} = \text{話者}; \text{ニ格、コト} = \text{V1}; \text{ヲ格} >$
- V3:  $\{ \text{itadak-} \} < A = \text{話者}; \text{ガ格、Source} = \text{聞き手}; \text{カラ格、コト} = \text{V2}; \text{ヲ格} >$
- V4:  $\{ \text{ta-} \} < P = \text{話者}; \text{ガ格} \rightarrow \text{ハ、コト} = \text{V2}; \text{ヲ格} \cdot \text{ガ格} >$
- V5:  $\{ \text{des-} \}; \text{V4 の丁寧化}$

構成要素動詞の結合で項関係は次のように変わる：

- (30) a. V1+V2 ; A が話者 → 聞き手、P が聞き手 → 話者、O 不変
- b. (V1+V2)+V3 : A が聞き手 → 話者に転換、聞き手が Source に。

.....

註 9) 上例 (26) のニヴ語の例文は Panfilov 1965 からの引用である。これらの問題については『ユーラシア言語文化論集』9号の Kaneko 2006 : A Note on CAUSE in Nivkh を参照されたい。

- c. ((V1+V2)+V3)+V4 : A は話者に再転換、聞き手は Source のまま。

- d. ((V1+V2)+V3)+V4) : 意志主体の A は話者。その他の項は不変。

このなかで(30a, b, c)が問題の過程で、項の変化が起こる。(30a) (V1+sase-)の 使役化によって「紹介する」という行動が話し手の主体的行動ではなく聞き手によって強要されたのと偽装される。次いで(30b)でその強要をもとの話者がありがたく頂戴すると主張される。さらに(30c)では、頂戴することを話者が希望すると言う。つまり自分の意志的行動がいったん聞き手によって強要されたものと偽装し、聞き手からの要求を謹んで頂戴することを希望すると主張する。その過程で動作主を被動者に、もう一度その被動者を動作主に再転換するからである。この幫間的偽装がこの種の表現の基底にある。その用具となっているのが使役と謙譲の表現による項特性転換という情報操作である。待遇表現の中でもっとも傲慢且つ卑屈な類である。一方、もとの文(29a)は文全体の動作主も相手も表層化されない。これは日本語の授与動詞、狭義の敬語動詞及び意図表現動詞などの特性でもある。それらが動作主や相手=被動者を意味的に指示することが、日本語が形態論的人称屈折を欠くことの代替になっている。以上の文法操作の示す理論的な含意をまとめておく。

- (31) a. 動詞複合体構成要素はそれぞれ固有の項特性を持つが、  
 b. 複合体構成過程で項特性が変更される。  
 c. 意味的に自明に推論可能な項は表層化されない。

### 1 1 . 語彙アスペクトと項特性との相互関係

語彙アスペクトは、コトの推移過程の類型を表すが、そのコトに関与する項についての情報を含まない。しかし語彙アスペクトが項特性を含意することがある。次の例を見よう：

- (32) a. 僕は家がない。(「ない」: ]na-[ ) → <P, 0 >  
 b. 雨が降る。(「降る」: [hur-] ) → <0 >  
 c. 蛙が泳ぐ。(「泳ぐ」: [oyog-] ) → <A >  
 d. 娘が結婚した。(結婚する」: [kekkkons-[res ) → <A, Concomitant >  
 e. 窓を開け放した。(「開け放す」: [ake-hanas-][eff ) → <A, 0 >

(32a)のような状態性用言の語彙アスペクト ( ] V [ ) は、項として目的0を持つ<sup>10)</sup>。「ある、いる、要る、ない」の他に「きれいだ、つめたい、わるい」などでも目的0は必須の項であるが、可能な被動者Pは動詞価にならない。一方「寒い、暑い、痛い」では目的0がなく、関与者としてPが付く。「私、とても寒い」のような場合である。この類のいわゆる感情形容詞は自叙で話者、疑問で対話の相手が被動者Pになるが、明示されないのが通常で、対照文や従属文内部というような統語的条件のもとで明示的に表示される。これらを勘案すると、状態文の可能な項(動詞価)には被動者 P も含まれて、状態性用言

の語彙アスペクト ( ] V [ ) に対して指定すべき項特性は、目的 0、被動者 P、場所 L などになる。しかしその全てが条件的にオプションである。敢えて言えば、状態用言の項特性として指定すべき動詞価は動作主 A が項にならないというネガティブな特性である。これを仮に非動作主性 non-active と名付けると、状態性用言の語彙アスペクト ( ] V [ ) が含意する項特性はこの非動作主性 non-activity となる。

次いで(32b, c)について見る。共に左右閉継続相動詞 ( [dur] ) の例である。両文はガ格の主語をもつが、その違いは(32b)では目的0、(32c)では動作主Aとされる。ここで問題は(32b)のAである。これは有生animateであるが、有意志A<sup>+INT</sup>であるかどうかは疑わしい。命令可能だとは言いきれないからである。この項の性質をさしあたりA<sup>-INT</sup>とすると日本語ではこれら有生のA<sup>±INT</sup>を一括して活動格activeとする形態的な支えが見つからないので、ここでは、これ以上の一般化を避け、別の論にゆずる。とまれ、この項特性の差異はコトの推移過程とその表示類型である語の語彙アスペクトの違いをもたらさない。つまり、動作主A=A<sup>±INT</sup>：目的0という対立は少なくともこの語彙アスペクトにとって有意味ではない。

(32d)の文は、Vendler の言う achievement 動詞、日本のアスペクト論では結果動詞に相当する。この類の語彙アスペクトは [(durative/punctual) ]res である。この文では動作主 A が必須だが、共格(concomitant)はオプションである。しかしこの語彙アスペクトが動作主 A を持つとは限らない。従って、この語彙アスペクトでも項特性はコト経過過程の特性とは有意味に関係しない。

(32e)の複合動詞「開け放す」は「-テイル」形がついて受け身的な結果の状態、「-テアル」形がついて能動の効果状態が表示されるので、Vendlerの分類では accomplishment 動詞、金子 1995 では効果動詞に相当する。この類の動詞では動作主Aは有生的animateでも無生的inanimateでも使役者Causerである。しかしCauserをA<sup>±INT</sup>と同一視することは不十分である。何故なら、それはA<sup>±INT</sup> ⇔ [sA<sup>±INT</sup>] という関係を含むからである。従って、この語彙アスペクトはこの意味要素を敢えて書き加えるならば、[(durative/punctual), Causer]eff であり、埋め込まれたコトに対する使役者の存在が含意される。

以上の例で見たように、語彙アスペクト類型と関与者の類型である項特性との間には必ずしも一対一の対応関係はない。効果動詞では使役者が含意されるが、それは項特性の要素ではなく、語の意味に内在する因果関係である。

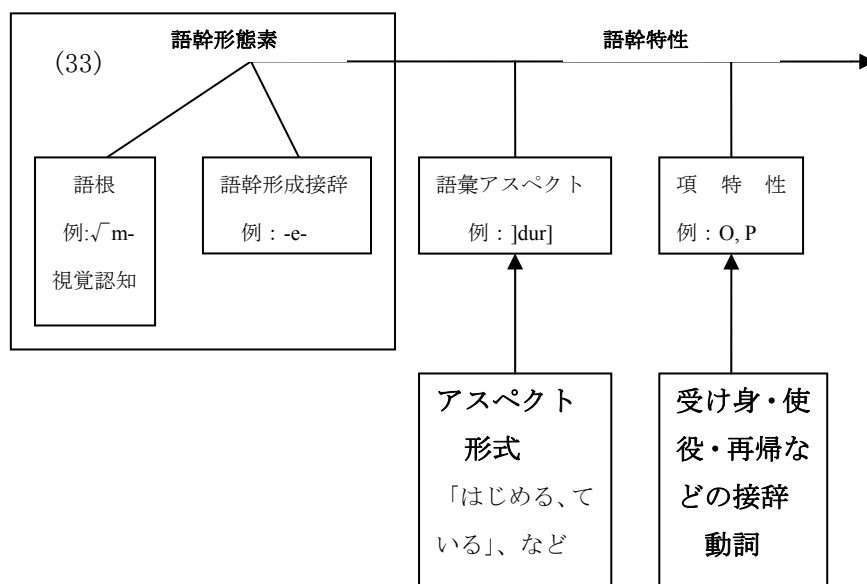
従って、語彙アスペクト類型と項特性の類型とは違うシステムに属する。つまり、それらは互いに異なったモジュールを成す。しかしこの二つのモジュールをつなぐ環がある。その環が動詞類の語幹形態素で、それが形成されたとき、二つのモジュールが出会う。

.....

註10) 状態動詞「欲しい、たい、好き」などの第1項は、A<sup>+INT</sup>であるのに行動性がない。一方でPであるためには意志性がある。そのためにP<sup>+INT</sup>とすべきかも知れない。この項の性格についてはまだ十分に分らない。英語で I do hope... が可能だからといって行為動詞とするのは問題があろう。

## 12. 語彙アスペクトと項特性との補正メカニズム

以上から語彙アスペクトと項特性が互いに相関しつつも、異なったモジュールに属することが分かった。また、8章と9章から、それぞれアスペクト形式が語彙アスペクトを補正して、後者の経過過程の一局面を焦点化すること、動詞語幹に一群の接辞的動詞が付くことによって項特性が変更されることを見た。すなわち、アスペクト形式は語彙アスペクトとは独立のモジュールを作りながら、語彙アスペクトに働きかけることが分かった。また受け身・使役・再帰などの接辞動詞も項特性とは別のモジュールを作っていて、それが動詞語幹の項特性を変更することが分かった。従って、動詞の意味的要素を決定する契機は、語幹形態素に関わるモジュール、語幹形態素の二つの特性要素を補正するさらに二つのモジュールが存在することが分かった。さらに10章では項特性が接辞的動詞の重層的な付加によって変遷することを見た。これら各モジュール間の相互関係を図で示すと次のようになる：



ここで、語幹特性に作用する二つのモジュール、アスペクト形式と受け身・使役・再帰の接辞動詞とがどういう順序で現れるかを考えてみる。

アスペクト形式は語幹拡張形式(17)に接続する。それはまた接辞動詞に付くこともある。一方、接辞動詞も語幹についてもアスペクト形式に付いてもよい。例文(34a, b)がそれらの例を示す。この例では「見る」が主動詞であって、アスペクト形式も接辞動詞も助動詞として機能する。主動詞に対する接続の順序は重層してもよい。これを(34c)のように表記しよう：

- (34) a. 日記を見られてしまった (動詞語幹－受け身－アスペクト)  
 b. 日記を見てしまわれた (動詞語幹－アスペクト－受け身)

### c. アスペクト形式 ∞ 接辞動詞

しかしこの重層的接続は無原則ではない。それは「たい、たがる、欲しい、欲しがる」の接辞動詞を巻き込むが、それ以上には及ばない。つまり接辞動詞の重層的接続の範囲は動詞語幹から伝聞の「そうだ」より左に限られているようだ。このことは動詞複合体を形成する接辞動詞の配列に関する一般規則を立てるときに必要な文法である。この問題も別に論じる必要がある。

### 1 3. 語根と語幹と接辞の複合

語根から動詞複合体を構成する手順をおおよそ見たところで、出発点をなす語根と語幹の構成とその意味の問題に立ち返る。

#### 1 3. 1. 語根と語幹の構成

語根から語幹を構成するとき、(1)の $\sqrt{m-}$ と(2)  $\sqrt{muk-}$  場合には語幹形成接辞が付いた。語幹形態素ができたとき、それには語彙アスペクトと項特性が付与された。ここで語幹の意味と形態が確定した。しかし一般には語幹形成のための派生接辞が無く、語根がそのまま語幹となることが多い。ごく数例をあげれば、次のような動詞では語根が語幹形成接辞を付けないままで語幹を形成する：

- (35) a. 要る： $\sqrt{i-} + \phi = \{i-\}$ , [dur],  $\langle 0, (P) \rangle$   
b. 滲む： $\sqrt{nijim-} + \phi = \{nijim-\}$ , [dur/gradual[res],  $\langle 0, (Lokal) \rangle$   
c. 切る： $\sqrt{kir-} + \phi = \{kir-\}$ , [dur]eff,  $\langle A, 0, (Instrment) \rangle$   
 $\phi$ ：語幹形成接辞の入るはずの位置。

これら語幹形態素の概念的な意味はおおよそ次のようだと考えてみよう：

- (37) a. 要る：「<sub>A</sub>誰か・何か $P^{\pm INT}$ には0が必要だが」、「<sub>B</sub>いま0が無いので」、話者は「<sub>C</sub>0が欲しい」  
b. 滲む：「<sub>A</sub>液体0と固体があって」、「<sub>C</sub>いま液体0が固体の一部Lの内部にだんだん(gradual)ひろがる」  
c. 切る：「<sub>B</sub>誰か $A^{\pm INT}$ または何かIが」、「<sub>C</sub>目的0を切る」  
但し、「<sub>A...</sub>」は前提、「<sub>B...</sub>」は現状、「<sub>C...</sub>」は表示されるコト(事象、事態の過程)。

いずれも形態素の意味は一つの複合概念である。それは(37a)では前提と現状を必要として、(37b)では少なくとも前提があって、それにコトの過程が表示される。また(37c)では目的の存在が予想されて、それに働くコトの過程がストレートに表示される。これらの語

よりもはるかに複雑な概念が一個の語幹で表現される例は枚挙にいとまがない。語幹の表現する概念は複合的でありしかも統覚的(apperceptive) <sup>1 1)</sup> である。

### 1 3. 2. 語幹の複合

動詞語幹が他の動詞語幹に直接に接続して語幹複合を形成する例は見あたらない。かねてから単純に(38a)と言われてきた形式は、形態論的に見ると、(17)の第二種の接続形式、つまり連用形が後続の動詞の語幹に接続したものである。連用形が語根の形態と同じのとときと派生接辞-i-が介在するときとを(38c)に示す<sup>1 2)</sup>。

- (38) a. 巡回規則 : [V + V] → V  
b. {V1-i-} + V2stem → V1-i-V2  
c. 例1 : 射返す ({i-φ} + {kaes-})、例2 : 照り返す ({ter-i-} + {kaes-})

このとき、複合要素の動詞の元来の語彙アスペクトと項特性が変わる。意味はそれぞれに合成されて元の意味を越える。(38c)の場合では過程の方向が反転するという意味が加味される。語彙アスペクトと項特性の変更の様子を以下に見る :

- (39) a. 射 : [min], <A, 0> + 返す : [min[res, <A, 0, D>]] → 射返す : [min[res, <A, 0>]]  
b. 照 : [dur], <0> + 返す : [min[res, <A, 0, D>]] → 照り返す : [min[res, <0, D>]]

このように動詞連用形が前接してできた複合名詞は、もとの合成要素と比べて、意味と語幹特性(語彙アスペクトと項特性)が違う。従って、この合成は新しい語幹を作ったと考えなければならない。こうした場合、例(39)で合成要素のどちらかが意味的に主要素(head)であるか、「返す」が接辞的であるかという議論は意味をなさないのではないか<sup>1 2)</sup>。元の合成要素の表現するコト(event)とその過程や方向の特性がどのように複合したかは、複合語の意味の分析の問題であって形態論とは関わらない。

.....  
註1 1) 「統覚」(apperception)とは、複合的な知覚(perception)が統合的にカテゴリー化された概念を指す。元来はカント、E., 『純粋理性批判』1787 第2章以下で提起された理論的所産である。これは記憶中枢に蓄積されたシナプス複合のタイプとその連合野的なモジュールの結合タイプとのフラクタルな結合に対応するのではないだろうか。

註1 2) 齊藤倫明『現代日本語の語構成論的研究』1992 ひつじ書房などがこの種の論議をしている。複合語の形態論的条件についてよく考える必要がある。

### 1 3. 3. 抱合的動詞複合

動詞連用形とは異なる形態が複合動詞の前要素になることもある。例えば、「旅立つ、泡立つ、浮き足立つ：手放す；上向く；苔むす」などの場合である。これらは一目見ると名詞抱合に見える。まず「旅立つ、泡立つ、浮き足立つ」の例では「立つ」に前接する要素は名詞だが、せいぜい(40)のような派生が考えられる程度である：

- (40)a. 「旅立つ」 < 「旅に立った」
- b. 「泡立つ」 < 「海が<sup>?</sup>「泡を立てたvt」」 → 「海が「泡-立ったvi」」
- c. 「浮き足立つ」 < 「彼はもう<sup>??</sup>「浮き足を立てたvt」」

この例では派生の過程がすでに疑わしい<sup>13)</sup>。また別の例では「手放す」は「手を放す、手から放す」のどちらが元であるか判別がつかない。この場合項は<A, Source, 0> → <A, Source>、または<A, 0>のような変更が想定される。しかし両例ともに規則性が見えない。「上(うわ)向く」は孤立的であり、「苔むす」は擬古的である。ともに生産性に欠ける。一方、連用形を主要素にして、それに名詞や副詞を前接する複合名詞の例は枚挙できる。「押し返す、開き返す、取り返す、掘り返す」など。しかしこれは全体として複合名詞が形成されるのであって、名詞を前接した複合動詞が出来るのではない。つまり「下向き、横向き、斜め向き」という複合名詞から「下向きになる、横向きになる」という連用形の複合名詞+動詞という複合動詞は出来ても、<sup>??</sup>「下向いた、横向いた、斜め向いた」は格標識省略か不適格と判断せざるを得ない。ここから現代の日本語では、名詞抱合による複合名詞形成が孤立的で非生産的であると見なさなければならない。従って、この種の孤立的な複合語は合成要素の意味と特性から複合語語幹の意味と特性を構成することはできない。それぞれの複合動詞の語幹には、元の構成要素から構成されるのではなく、既にひとまとめになった複合語全体の意味と語幹特性が指定される必要がある。

#### 14. おわりに

かつて動詞の意味を機械読み可能な形で書けるはずだという信念があった。形式統語論と意味記述が同型(homomorphic)であるはずだというのである<sup>14)</sup>。その後、句構造文法(PSG)によって作られる派生構造を統語部門と語彙形成部門とに分けて、語の意味記述は語彙形成部門によって行われるという主張がされた。この同型派生構造の接点が語彙挿入という変形とされた。生成意味論であった。ここで提案された樹構造図形を同型の一元表記にすると、例えばkill=(x CAUSE(y BECOME(NOT(ALIVE))))<sup>15)</sup>が或る派生段階で統語樹形に挿入されるというのである。この理論はまもなく変形文法に多くの形式的矛盾を持ち込

.....  
13) Mark C. Baker 1988 のような深層構造とそこからの「抱合変形」を立てても、これらを派生させるには無理がある。格標識削除と無原則な移動を必要とするからである。

むことを指摘され、一方で語彙記述能力に自明の制約が見えたので、10年後には潰え去



った。しかし二つの分野で生き残りのチャンスを見いだした。一つはモンターギュ文法を使った機械翻訳計画であった<sup>16)</sup>。その後、計算機の能力が向上するにつれて、使用される理論も方法が多様化して、もはや「計算機言語学」という名が博物館入りしている状況である。一方、もう一つの生き延び作戦は、生成意味論の企図を換骨奪胎して認知的普遍の記述に使おうとする企図であった。70年代に提案されたいくつの述語を意味論的要素 (semantic primitives) と名付けて温存し、それでも足りない部分を個別言語要素の一部や多分に場当たりの補正的用具を用いて語の意味の分析に使おうとした。この試みが何とかやりくりを重ねて不思議なことに今日に及んで未だ生き延びている<sup>17)</sup>。

しかし、上で見てきたように、本当の問題は、それぞれの言語の語彙の語根の意味の多様性をどう捉えるか、そこからどのような類型的規則性を取り出せるかである。そのための方法的な視点を定める必要がある。その原則は次のようなものではないだろうか。

- 1) 意味の単位は語根である。決して、CAUSE や BECOME ではない。これらはただかたがた類型的特性にすぎない。それは統覚的概念としておそらく生理的支えをもつ。
- 2) 語幹形態素の形成に伴って語彙アスペクトと項特性が定まる。語根の意味を中心とした意味要素の第一次的なモジュールが形成される。これらも生理的支えをもつだろう。瞬間的に形成されて、しかも安定した記憶情報がそれに対応するかも知れない。
- 3) 語根のもつ意味と語幹形態素の意味が成立するためには、前提、様態、予想、類推などの意識の連合が常態である。これらの要素は含意ではなく内包であり、意味の成立に伴った形成される瞬間的構築物であり、その連合が強化されることによって安定した意味の構成部分となる。これもまた生理的組織に対応物もつのだろう。
- 4) 語の意味は文化である。つまりその使い手の社会集団的生活様態を体現する。個別言語的な特性の集合である。普遍を満腔に飲み込んだ特殊であって、論理式の一部を個別言語の語彙に替えて記述できるようなものではない。しかし他言語が異言語の語彙の語根の意味を解説できない訳ではない。それは丁度、個人間でも伝達理解のずれを乗り越える方法があるのと同様である。

.....

註14) 嚙矢は Yehosha Bar-Hillel: Aspect of Language 1970 の諸論文であったと思う。二つの意味論的要素 primitives を用いた Turing-Machine での読み書きが問題であった。

註15) 典型的に故 James D. MacCawley 1968/1969 のペーパー類に書かれて伝説的に例示された例である。

註16) 日中機械翻訳プログラム 1980 は実際に Mongague 文法を中間言語として開発された最初の成功した機械翻訳プログラムであった。

註17) 典型例として R. Jackendoff, J. Pustejovsky, 影山太郎らの諸論を名指すに止める。ただ、二言語対照研究などを手がけると、つい意味論的共通項を見つけてそれに個別の意味要素を取り付けたくなる。これは同情に値する陥穽である。

- 5) 最後に、抱合を使うかどうか、主格構造や能格構造を選ぶかどうかなどの選択はその

言語の話者の統語・形態論的な趣向に帰すべきものか、それとも語根の意味を含めた言語の成り立ち方に根ざすものか。それはまだ分からない。しかし語根から語幹を経て動詞複合体を構成する個別言語的手順が何らかの関係を持っているかも知れない。語根と語幹の意味要素が形態と統語の構成に色濃く投影しているからである。

#### 参考文献

- Åqvist, L. & F. Guenther (1978): *Fundamentals of a Theory of Verb Aspect and Events within the Setting of an Improved Tense Logic*. in: Guenther, F. & Ch. Rohrer: *studies in formal semantics*. North-Holland
- Comrie, B. (1978) Ergativity. in: Lehmann, L. W. (ed.), *Syntactic Typology*. Texas
- Dixon, R. M. (1994): *Ergativity*. Cambridge Studies 68
- Haspelmath, M. & E. Koenig (1995): *Converbs in Cross-linguistic Perspective*. Mouton/Degruyter
- Panfilov, V. Z. (1965): *grammatika nivhskogo jazyka*. IAN-SSSR
- Sasaki, Kan 佐々木冠 (2002): 格 (『方言の文法』シリーズ方言学2) 岩波書店